

面処理ではひどい薬害を起すものもあるが、播ツボ上を処理せぬように散布すれば薬害はほとんどなく、生育及び収量は影響を受けない。これはまず直根が深く伸長し側根が相当巾のある層に発生伸長するため薬害をうけないか、受けても軽微に終るものと思われる。

除草効果はいずれにも認められるが、単独使用よりCMUとIPCの混用が顕著な効果をあらわしており、除草剤の作用特性と草種との関係に基づくものと考えられる。

混用の割合は簡単には決定されないが、おおむねCM

U40g (酸量) と C1-IPC 300cc (製品量) が一応の指標となりうるものと思われる。

問題は播種された部位に絶対処理しないことと、雑草の多い畑では追肥と中耕後相当の草が繁茂するので手取り除草が必要となる点である。

附記

以上3種類のそさい畑での除草剤利用試験についての概要を述べたが、詳細は下記を参照されたい。

宮城県立農業試験場報告 第26号: 79~88 (昭和35年4月)。

マクワウリF₁の育成経過と特性の概要

柿崎 正策・相沢 富夫

(山形県農試)

1. 育成目的

山形県の内陸地方では古く(明治末期ごろ)から銀マクワ(甘露系)が栽培されてきたが、種苗業者が各自に採種販売している関係上、現在では相当雑ばくになってきている。その銀マクワは収量・香りとも高い方であるが糖度が低く(大体7~9%), ニューメロン系より食味ははるかに劣る。しかし、ニューメロン系は収量と耐病性について難点がある。そこで香りと糖度の高い増収型の優良品種を育成しようとして1954年からF₁の育成を開始したが、一応目的に近い組合せを得たのでその概要を報告する。

2. 育成経過

マクワウリの白メロン・ニューメロン(M・G及びKの3系統), 金俵マクワ及び露地メロンのロッキフォードの6品種(系統)を母とし、ハネデュー・アールス・パール及び興津の4品種を花粉親として1954~1956年の3カ年に11の組合せを作り、そのF₁について実用性を比較検討した結果、ニューメロン(M系)×パールの組合せが香り・糖度及び収量が高く、その他結果習性・収穫時期及び個重等の特性も11組合せ中最も育種目標に近かった。しかし母としてのニューメロン(M系)は多少雑ばくであったため、以後系統分離によって外度淡緑色・卵円形で個重350~500g程度の良質の1系統を選抜し、それにパールを交配してF₁を育成しその特性を検

討した結果、特に都市近郊で早出しをねらう場合のトンネル栽培用として普及性の高いことを認めたので、この系統に対して「宝玉」と命名した。

3. 特性

草勢

雑種強勢が現われ草勢は強く、茎葉は花粉親であるパールに似て、太く大きく厚みをおび、一見してニューメロン系と容易に区別することができる。

結果習性

一般にマクワウリの雌花は孫蔓に着生するのが普通で子蔓への着生はごくまれにみる程度であるが、このF₁は子蔓・孫蔓及びヒコ蔓の各第1節目に着生し、各蔓とも第2節以後にはほとんど着生しない習性をもっているのので、子蔓に着果したものは果重はやや小さいが収穫始めは早い。

これらの関係は第1表の整枝法についての試験成績によってもうかがえる。したがって、早期の収量をねらう場合は親蔓1本・子蔓及び孫蔓の各3枚目で摘芯し、主枝である親蔓は約20枚前後でとめる。また、全期間を通じて平均した収量をあげるには子蔓2本を出し、孫蔓は3枚目で摘芯する方法が適当と思われる。また、開花後収穫までの日数は気温によって差異もあるが、6月上旬ごろの開花であれば大体30~35日で収穫に適当な熟度に達する。

熟度鑑定

第1表. 整枝方法についての試験の収量調査

(1960年)

項目 区別	収穫始め	早期収量	全期収量	裂果率	重量別の変異				
					200以下	201~300	301~400	401~500	501以上
A	7.15	44.2	83.0	10.0	4.6	30.0	35.3	21.5	8.5
B	7.9	50.2	99.7	13.1	4.1	16.6	40.2	30.5	8.5
C	7.9	41.2	122.6	6.7	2.3	13.8	33.3	26.5	24.1
D	7.9	14.6	117.0	4.1	1.2	9.2	23.1	30.7	35.8
E	7.9	37.1	124.7	6.8	2.0	18.2	35.9	23.6	20.3

- 注：1. 播種期；4月6日，定植期；5月10日。
 2. 畦 巾；1.8m，株間；60cm（マルチ併用トンネル栽培）。
 3. 1区面積；19.8m²。
 4. 早期収量は収穫始めから7月25日まで，全期収量は収穫始めから8月9日まで。
 5. 試験区内容；A. 親蔓1本，子蔓3枚目摘芯。
 B. 親蔓1本，子蔓孫蔓3枚目摘芯。
 C. 子蔓2本，孫蔓3枚目摘芯。
 D. 親蔓及び子蔓各1本，子蔓・孫蔓3枚目摘芯。
 E. 親蔓1本・子蔓2本，子蔓・孫蔓3枚目摘芯。
 なお主枝は20枚目摘芯。

第2表. 栽培方法についての試験成績(1959年)

区名	上裂果別	項目	1区当り		10a換算重量	1株当り		1個平均重
			個数	重量		個数	重量	
A	上裂	果	167	56.070	3,092.3	10.4	3.504	336
		果	39	14.470	798.0	2.4	0.904	371
		計	206	70.540	3,890.3	12.8	4.408	342
B	上裂	果	159	50.970	2,311.0	9.9	3.186	321
		果	26	8.740	482.0	1.6	0.546	336
		計	185	59.710	3,293.0	11.5	3.732	323
C	上裂	果	133	44.680	2,464.1	8.3	2.793	336
		果	45	14.315	789.5	2.7	0.895	333
		計	176	58.995	3,253.6	11.0	3.688	335
D	上裂	果	127	44.570	2,458.0	7.9	2.786	351
		果	43	15.500	854.8	2.7	0.969	360
		計	170	60.070	3,312.8	10.6	3.755	353
E	上裂	果	117	37.735	2,081.1	7.3	2.358	323
		果	42	15.630	862.0	2.6	0.977	372
		計	159	53.365	2,943.1	9.9	3.335	336
F	上裂	果	116	39.535	2,180.4	7.3	2.471	341
		果	26	8.610	474.8	1.6	0.538	331
		計	142	48.145	2,655.2	8.9	3.009	339

- 注：1. 播種期；4月6日，定植期；6月12日。
 2. 畦 巾；1.8m，株 間；60cm（平高畦）。
 3. 1区面積；19.8m²。
 4. 試験区内容；A. 炭俵埋没，ビニールマルチングトンネル併用区。
 B. 炭俵埋没，ビニールマルチングトンネル併用，蔓上区（ヨシズに蔓を伏せ，地上約20cmに上げた）。
 C. 土管（径6cm）埋没，ビニールマルチングトンネル併用区。
 D. 稲藁束（径10cm）埋没，ビニールマルチングトンネル併用区。
 E. ビニールマルチングトンネル併用区。
 F. ビニールマルチング区（標準）。

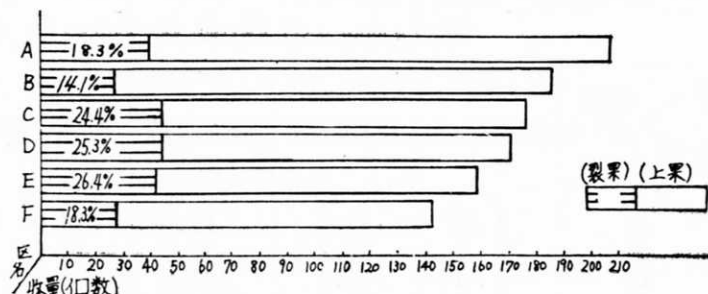
収穫初期には適熟に達しても果梗から果実が離れないものが多いが、収穫最盛期以後は、適熟に達するとほとんどの果実が果梗から離れ落ちるので鑑別は容易である。しかし収穫初期のものでも、果梗部周囲の皮色が緑色から淡黄色（アメ色）に変じ、尻部がやや軟かくて芳香を放つようになった果実は、たとえ果梗から離れ落ちなくても収穫適期に達したものである。なお、このF₁は収穫後2～3日間の室内貯蔵後にたべるのが適当である。

果実の特徴

果は長楕円形の黄緑色でネットは現われない。果肉は淡黄色で糖度が高く普通13～15%で安定しているが、中には17～18%の高糖度のものもあり、11度以下の低糖度のものはほとんどなく芳香も高い。ただし、排水不良の土壤で着果後に降雨にあうと土壤湿度が高くなるため、収穫直前の果実は裂果し易い欠点をもっているため、ある程度の高畦栽培や麦稈の埋没による排水の助長、マルチングによる湿度調節等の肥培管理が望ましい。このことは第2表及び第1図の栽培方法についての試験成績にも現われているように思われる。

耐病性

べト病・タンソ病はニューメロン系より強く、銀マクワ



第1図. 栽培方法についての試験 (1959年)

—上果と裂果の比率(1区の総個数)—

よりは若干弱いようである。また、普通栽培ではかなりバイラス病の発生が見られるので、温床育苗によるトンネル栽培またはハウス栽培などによってこの病気の回避をはかることが大切で、山形地方では4月上旬に播種し5月中旬トンネル内に定植するのが適当と考えられる。

4. 普 及 性

このF₁は以上のような特性からみて、普通直播栽培にはあまり適せず、都市近郊で早出しを目的とするトンネル栽培や、ハウスの胡瓜後に入れるやり方が特に普及性が高く、また、その他の地方でもある程度の集約栽培が可能であれば、輸送園芸地帯にも十分普及性があるものと思われる。

砂丘地でのチューリップの施肥についての試験

梅 本 俊 成

(山形県農試砂丘分場)

裏日本一帯の砂丘地では戦後急速にチューリップ球根栽培の導入をみたが、その栽培規準の多くは先進地の慣行にたより、砂丘地での栽培上の特異性を忘れていたきらいが多分にあった。特に施肥についてそうであって、富山・新潟両県の砂壤土或いは壤土地帯の施肥方法、すなわち当時の有機質主体の肥料代の高きかきむところの絶対元肥主義の多肥栽培がとり入れられているが、当然砂丘地では疑問が多く、しかも先進地のこのような施肥方法にしてもよるべき規準がなく、慣行の積み重ねでできてきたものであった。

これらの問題について、明らかにするため、昭和28年から行なってきた主な試験についてその結果をまとめて報告する。

1. 肥料要素差異について

砂丘地の肥料要素の差異がチューリップの生育・収量及び品質等に及ぼす影響について知り、施肥上の参考に供するために次の方法によって試験を行なった(成績第1表)。

チューリップ等の球根類では種球からの養分の供給がありその栄養相は相当に複雑であることが考えられるので、初年度には栽培条件の斉一な生産球を用い、しかも球根重量は均一なものを採るよう努めた。次年度からは同一試験区で生産した球根を同一試験区に供試する方法をとった。供試品種はレッドピットで、供試面積は3.3m²として96球を入れ、3連制で試験した。施肥量及び栽培方法は当該耕種規準による。